〈池袋学〉をふりかえる
――新宿、渋谷、池袋。三つの地域学を比較する

戸沼　幸市／石井　研士／後藤　隆基
太下　義之／阿部　治／［司会］近藤　泰樹

二〇一四年から三年間、東京芸術劇場と立教大学が連携して「池袋学」を開講してきました（延べ二十三講座・講師三十名）。今年度は、先行する「新宿学」（＝早稲田大学が一九八八年に開講）と、「渋谷学」（＝國學院大學が二〇〇二年に開講）との比較を通して、「池袋学」の三年間をふり返ります。併せて「池袋学」の次の展開について、皆様と共に考えます。

シンポジウムの前に

近藤　泰樹

シンポジウムに先立ちまして「新宿学」「渋谷学」「池袋学」のそれぞれについて、概要を簡単にご紹介します。

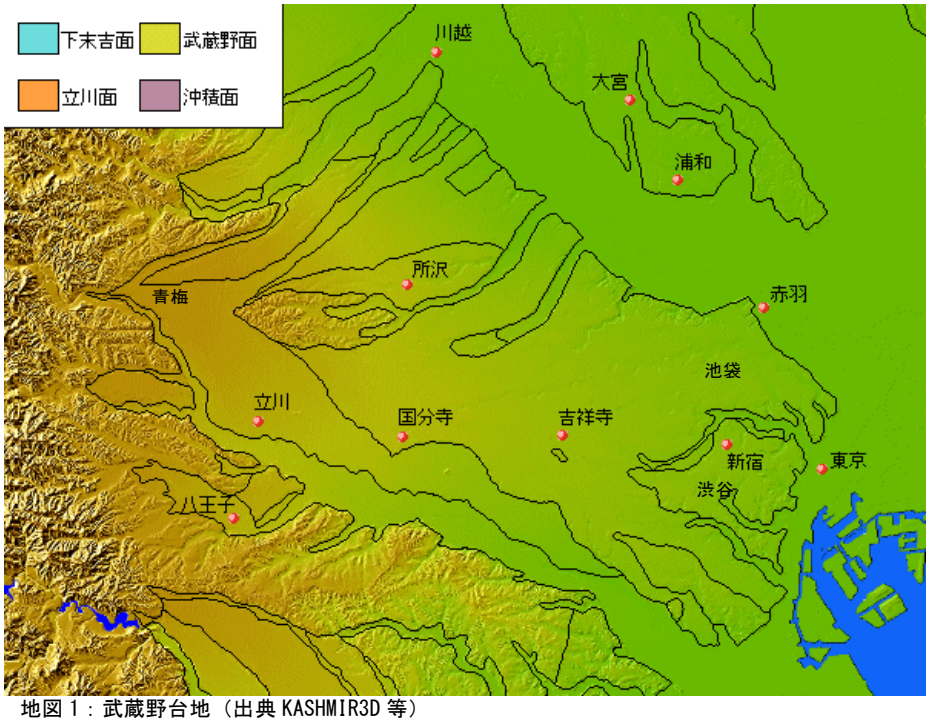
早稲田大学が主催する「新宿学」は、二〇〇四年から二〇一六年まで、早稲田大学でオープンカレッジとして開講された授業が中心です。二〇一三年からは「東京都健康プラザハイジア」などでも講座が開かれ、十年間で延べ二二〇回講座が開かれました。その成果として、二〇一三年に『新宿学』（紀伊國屋書店）が刊行されました。

國學院大學主催の「渋谷学」は、二〇〇二年より國學院大學の百二十周年記念事業として始められました。二〇〇八年からは、國學院大学の研究推進機構の中に「渋谷学」研究会として継続され、その成果は『「渋谷学」叢書』（第一～五巻、雄山閣、二〇一〇～一七年）として刊行されています。またこれとは別に、石井研士先生の単著で『渋谷学』（弘文堂）が二〇一七年に出版されています。

「池袋学」は、東京芸術劇場と立教大学の共催で、三年間で二十三講座を開講してきました。成果としては、講演録を毎年一冊

ずつ刊行しています。

次に、三つのまちの共通点と相違点をご紹介します。まず共通点は、武蔵野台地の東端に位置していることです。武蔵野台地とは、北側を荒川、南側を多摩川で囲まれた地域で、北は川越、西は青梅・八王子まで広がる地域です。東西五十キロメートル、南北四十キロメートルに広がる日本最大級の洪積台地と言われています。この台地と東京下町地域の境界線は、ＪＲの京浜東北線に沿った崖のライン上にあって、高低差は十～二十メートル、青梅あたりでは百八十メートルで、西高東低のなだらかな傾斜上にあります。



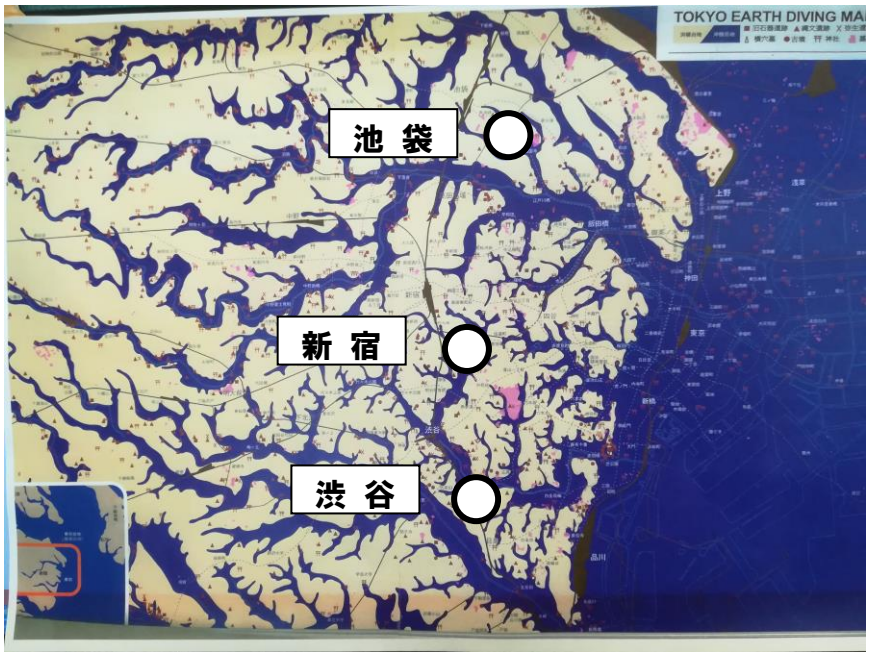
地図１：武蔵野台地（出典 KASHMIR3D 等）

【地図①】

続いて、相違点についてお話しします。新宿は、武蔵野台地の中の淀橋台というほぼ平坦な土地で、現在は暗渠ですが蟹川の河谷を境に豊島台と接しています。渋谷は同じ淀橋台のうえにありますが二十あまりの細長い河谷に侵食されて多くの坂道が亀裂のように走る特徴的な地形を形成しています。池袋は、淀橋台の北方にある豊島台の上に位置し、浸食谷があまり多くないほぼ平坦な地形です。【地図②】

次に「新宿学」「渋谷学」「池袋学」のそれぞれについて、動機や目的をまとめてみました。

「新宿学」は『新宿学』（紀伊國屋書店）からの引用です。



地図２：「TOKYO EARTH DIVING MAP」に引用者が３つの町をプロットしたもの。中沢新一『アースダイバー』（2005 年講談社刊）より

新宿に、青春の門から入り、朱夏の時を過ごし、今、玄冬に向かう私自身の白秋の峠から新宿のまちの風景を眺めつつ、自分史に重ねて「新宿について、新宿の場所の力について考えてみたい」というのが「新宿学」

を始めた私自身の動機であった。（中略）「新宿学」では、新宿のまちの発展を歴史的、文化的に位置づけ、地理地形や土地利用、都市計画の要素を視野に入れながら、そこで展開された人々の営為をさぐり、このまちの未来をも探求してみたい。

（戸沼幸市「はじめに　私の新宿、そして「新宿学」」）

『新宿学』の第二章では、新宿の地理・地形・植生を扱い、第三章以下では街道・宿場の設置と内藤新宿、江戸の大名屋敷など、歴史的な変遷が概観されています。その後第六章では、鉄道史、商業史、老舗の歴史と続き、第八章では歓楽街、歌舞伎町の考察、第九章では西新宿に誕生した超高層ビル街について、最終章では新宿の未来図で締めくくられています。

「渋谷学」のきっかけは、『「渋谷学」叢書』（雄山閣）第一巻の「國學院大學『「渋谷学」叢書』刊行のことば」において、次のように述べられています。

平成十四年に創立百二十周年を迎え、その記念事業の一環として、「渋谷を科学する」というテーマを掲げ、「渋谷学」を創始しました。（中略）渋谷は、過去から未来にわたって、大学と学生たちを育てる場であるとともに、研究の対象としてきわめて興味深い存在でもあります。東京には全国に知られた都市がいくつもありますが、渋谷はその中でも独特の存在といえます。この渋谷を多面的に明らかにしようというのが、「渋谷を科学する」の中身です。（倉石忠彦編著『渋谷学叢書1　渋谷をくらす――渋谷民俗誌のこころみ』雄山閣、二〇一〇年）

渋谷という場所を多面的なアプローチ視点から明らかにするということが表明されています。叢書の第一巻から第五巻までのタイトルは以下の通りです。

□倉石忠彦編著『渋谷をくらす―都市民俗誌のこころみ』（二〇一〇年）
□上山和雄編著『歴史のなかの渋谷―渋谷から江戸・東京へ』（二〇一一年）
□石井研士編著『渋谷の神々』（二〇一三年）
□田原裕子編著『渋谷らしさの構築』（二〇一五年）
□上山和雄編著『渋谷　にぎわい空間を科学する』（二〇一七年）

多面的と言われるとおり、第一巻は民俗学、第二巻は歴史学、第三巻は宗教学、第四巻は経済学、第五巻は地域学からのアプローチとなっており、さまざまに切り口を変えながら、多面的、重層的な研究が行われています。

次は「池袋学」です。その意図について、広報用チラシや講演録の巻頭言から抜粋しました。

池袋に住む人、暮らす人、池袋で働く人、学ぶ人、池袋を訪れる人、みんなが参加できる池袋学を今年も開講します。こ

のまちの由来や歴史、文化、暮らし、町並みなど、色々な視点で池袋を語ります。そしてこれからの池袋について考えます。

（東京芸術劇場×立教大学　池袋学　チラシ）

池袋学は、もとよりここに住んでいる人や生まれた人のみを対象にしているものではない。（中略）池袋を通過する人でもいい。池袋への旅人でもいい。池袋を愛する人のための学である。歴史学というよりも、現代に住む人からの目線を第一に考える視点を持ち続けたいと思う。（渡辺憲司「池袋学事始」『「池袋学」二〇一四年度講演録』より）

池袋というまちの由来や歴史、文化、暮らし、町並み、景観など、あらゆるものを対象に、多様な視点で考えると宣言されています。また、池袋を愛する人のための学であること、講座を通じて、二十一世紀の東京の文化を切りひらく、コミットメント等も表明されています。

講座の内容は、大きく三つに分かれます。ひとつは、春季に三回、東京芸術劇場で開催されたものです。池袋モンパルナス、トキワ荘、セゾン文化の三つのテーマを三年間繰り返し取り上げました。それぞれの演題は次の通りです。

【池袋モンパルナス】

□池袋モンパルナスの時代

□池袋モンパルナスの原風景

□あわい（間）の街としての池袋、そして池袋モンパルナス～社会心理学からの考察～

【トキワ荘】

□トキワ壮の時代

□トキワ荘と池袋のマンガ文化

□『漫画少年』とトキワ荘の時代～世界に広がるアニメブームのルーツを探る～

【セゾン】

□池袋のセゾン文化

□セゾン美術館の日常～前衛の拠点として～

□スタジオ２００～八〇年代の新しい体験教室～

二つめの秋の講座は、主に立教大学の教員を中心に、文化史、鉄道史、観光学、社会学、都市論などからアプローチしました。

【二〇一四年度】

□池袋学と自由の発信

□都市観光地としての池袋

□持続可能な未来を志向した池袋学をめざして

【二〇一五年度】

□多様な文化を生み出す都市・池袋～都市研究の観点から～

□女性が暮らしやすいまちづくり～消滅可能性都市から持続発展都市へ～

□リアル池袋論～国際都市としての池袋～

【二〇一六年度】

□池袋は鉄道から始まった～池袋の鉄道史と未来～
□池袋は〝演劇都市〟になれるか～その過去・現在・未来～
□多文化共生の池袋～立教大学の果たす役割を考える～

三つめは、夏季または冬季の特別講座で、その年の社会的な話題などを池袋と絡めて取り上げました。二〇一四年度はＮＨＫ朝の連続テレビ小説『花子とアン』で登場しその当時西池袋に住んだ柳原白蓮の戦後を、二〇一五年度は戦後七十年という節目として池袋の「ヤミ市」について、二〇一六年度は池袋の南一帯は元来その地名でもあった雑司が谷を取り上げました。

【二〇一四年度（冬）】
□柳原白蓮の戦後～銃後の母から世界連邦運動へ～
【二〇一五年度（夏）】
□戦後池袋の検証～ヤミ市から自由文化都市へ～
【二〇一六年度（夏）】
□雑司が谷の魅力、雑司が谷と法明寺の歴史、未来遺産運動と雑司が谷

「池袋学」は、劇場と大学による連携事業でしたので、アートの視点、アカデミックな視点、そしてその年の時宜に合った視点など様々なアプローチをとることができました。

以上が三つの地域学のスタートの経緯と現時点での成果です。

先ほど、中沢新一氏の『アースダイバー』マップを紹介しましたが、今から数千年前の縄文海進期と呼ばれる時代に、洪積層という堅い土でできている地層が地表に残り、海水が浸食した後の沖積層はフィヨルド状の亀裂となって今に残ったということです。その後、かつて岬など突端だった場所や、湖沼などの窪地は生と死の境目として墓地や古墳、神社や寺院などいわゆる霊地または聖地になったと言われています。

池袋は明治三十六年に鉄道の駅が設置されて以降、飛躍的に発展しますが、元々そこにはどのような力が備わっていたのか、昭和の初期に全国から要町や千川一帯という池袋の後背地に若い画家たちが集まり「池袋モンパルナス」と自称したり、戦後の当時はまだ無名だった若い漫画家たちが『漫画少年』という雑誌に描くために「トキワ壮」に集ったり、西武百貨店の堤清二氏がセゾン旋風を巻き起こす拠点となった《池袋》には、どのような場所の力が働いていたのか。なぜ池袋だったのか。土地の力、土地の磁力のようなものを知りたいという思いで「池袋学」を運営してきました。その答えはまだ見つかっていませんが、本日は三年間の試行錯誤を経て、ひとまずその検証を行えれば幸いです。

これより、先達でもあります「新宿学」と「渋谷学」の先生方からそれぞれご示唆をいただければと思っております。

「新宿学」
――地域に対する思い入れの強さ

戸沼　幸市

今日は「池袋学」の応援団として呼ばれたようで、多少なりと

も参考になることが話せればと思います。

新宿というのは不思議なところで、昔からの地域の親方が大勢います。紀伊國屋や新宿高野、中村屋などをはじめ、商店街の親父さんたちから、いろいろな話を聞かせてもらいました。『新宿学』（紀伊国屋書店、二〇一三年）も、紀伊國屋書店の方と話して出版が決まったものです。本が出版されると、みなさん、たくさん買って地元の人に配ってしまうんです（笑）。こういうパワーは新宿ならではのものでしょう。

私の専門は、建築や都市計画です。私の大学の都市計画の石川栄耀教授は、東京の戦災復興の計画を立てた人ですが、鈴木喜兵衛たちとともに歌舞伎町計画をつくりました。「赤線」地域だった新宿二丁目は、内藤新宿の時代には江戸で一、二を争う色街として繁栄した場所です。そうした影のようなものがある土地、それが新宿です。私のような、田舎から出てきた者にとっては「なんだ、これは」というようなところでした。五木寛之の『青春の門』は赤線が舞台となっていて、そこでの地べたを這うような生活を人間の生き様として典型的に描いています。自分の歴史に重ねながら自分が長い時を過ごした新宿というまちを見てみようと思ったのが私の「新宿学」開設のきっかけです。けれども、自分の記憶というのは非常に曖昧なものですから、まちの人の話を集めて『新宿学』という本を出したわけです。

私は都市計画の専門家ですから、昼間は大学で都市計画に関することなどを学生に教えていました。それは、夜の「新宿学」のための、いわば前座です。新宿は、昼と夜ではまったく違う顔を見せます。夜、学生を歌舞伎町に連れて行って、知り合いの飲み屋で店主も交え、学生と都市の夜の学習です。今よりもまち全体の懐が深い時代でしたから、通常の値段の半分ほどで私たちに場所を提供してくれたりして、大変お世話になりました。飲み屋のおじさんやおばさんは、僕らの知らない情報をたくさん持っています。お酒を飲みながらの学問というのは、非常に良いですね。そこには、学校の教室での板書の授業では得られない学びがあります。卒業生と話す機会があると、彼らが覚えているのは決まって夜に話したことです。飲み屋のおじさんから教わった女性の手の握り方などを覚えている学生もいます。

それに関連して、都市学、都市計画学は、やはり現場主義を徹底しています。地べたの感覚で勉強しようじゃないか、ということを大事にしたいのです。「新宿学」の一講座は、だいたい三十人くらいで、時には花園神社の宮司の方や熊野神社の氏子総代の方に話をしてもらったりしました。「新宿学」でお話しをしていただいた方たちの中には、すでに亡くなった方も多くいらっしゃいますが、みなさんの話された内容の音源データは保存してありますし、それはもちろん貴重な資料です。

それから、講師の方の一人ひとりが、新宿に対して強い愛情を持っていることも「新宿学」の特徴です。それはやはり、地域に対する思い入れの強さから来るものだと思います。そうした強い思いをもった方たちの話を、体系的に記述したのが『新宿学』です。新宿とはどのような場所でどのように発展したのかということをふまえ、未来への見通しがまとめられています。新宿をめぐる年表や、地理・地形の資料も収められています。現在、新宿駅の乗降客数は一日約三百五十万人と言われ、世界最大です。これ

をどう解析していくかということも「新宿学」の一つのテーマになります。

私は、歴史そのものというよりは、未来を組み立てる視点を探すために過去の出来事を見ています。新宿の未来については「都市マスタープラン」というものが策定されましたので、後ほどお話しします。

「渋谷学」
――祝祭の場としてのスクランブル交差点

石井　研士

こんにちは。石井でございます。戸沼先生ほど味のある話はできませんが（笑）、どうぞよろしくお願いいたします。

私は代々東京生まれ東京育ちで、母の家系も父の家系もずっと江戸っ子です。私も学校や職場に関して、東京を離れたことはありません。調査で海外や地方に出ることはありますが、基本的に東京で生活をして東京で研究をしています。私は宗教学が専門なので、キリスト教学科に先輩や後輩が大勢います。早稲田大学は父と家内が卒業生です。現在は大泉学園に住んでいますが、立教大学から五、六分のところに十年ほど住んでいたことがあるので、池袋には愛着を感じております。

宗教学がある大学は限られていて、旧帝大系では、京大は宗教哲学に特化していますし、東北大学はフォークロアに近いところがあります。そのため、私の専門である宗教社会学は少なく、現在は國學院大學におります。宗門系の大学に何人か宗教学の専門家が混ざっているという状態ですね。

「渋谷学」は、國學院大學の百二十周年を記念して理事会直轄の行事として予算がついております。それ以前にも、いろいろなことを調べてくださっていた先生方がいらっしゃいましたが、その成果をもとに、百二十周年を契機として正式な大学の研究になりました。早くから「渋谷学」に熱意を持っていた方が二人いらっしゃいます。民俗学者の倉石忠彦（國學院大學名誉教授）と、歴史学者の上山和雄（國學院大學名誉教授）です。

國學院大學は、柳田国男や折口信夫が在籍していたこともあって、民俗学の先生が多くいらっしゃり、倉石先生もそのうちの一人でした。一時期、民俗学の中に「都市民俗学」というジャンルができて、多くの関心を集めました。民俗学というのは、空間的に言えば、都市よりは地方や田舎、山村をフィールドにしています。歴史的には、文字に残った資料よりは口承伝承を中心に古いところにさかのぼっていくわけです。けれども、高度経済成長期に差し掛かる頃になると、明治生まれの人が少なくなり、昔の話を直接聞くことが難しくなってきました。日本全体の都市化やテレビの普及によって地方文化も均質化し、ローカリティも失われていきます。このように、民俗学のフィールドが失われていく中で、都市を研究対象にできないかということで、都市民俗学が注目を集めたわけです。最も大きな成果は、おそらく「学校の怪談」とか都市伝説といった口承伝承に関するものです。

「「渋谷学」叢書」の第一冊目は「渋谷をくらす――渋谷民俗誌のこころみ」です。渋谷にある道祖神などを見つけて、都市の

中にも日本人の常民文化を基にした文化が残っているのだということを検証しようとしたわけです。しかしその後、都市や口承といった情報を相手にした時、柳田や折口がつくった基本的な枠組みでは捉えることができないということがわかってきてしまった結果、都市民俗学は凋落します。今となっては、あまり重要視されないで終わってしまったような領域だと、私は思っております。

もう一人は、上山和雄という戦後史の研究者で、渋谷に関心を持っていました。一九六四年開催の東京オリンピック中継のためにＮＨＫが渋谷に進出してきました。昭和三十年代に普及しはじめたテレビによって、渋谷の町並みが多くの人の目に触れることとなりました。ＮＨＫが渋谷に本拠地を構えたことは、その後の渋谷の発展に大きく影響しました。オリンピック会場は国立代々木競技場、選手村は現在の代々木公園でしたから、渋谷周辺地域には莫大な資産が投入され、変貌を遂げました。

その後、一九六八年の西武デパート渋谷店の開店や、一九七三年の渋谷パルコの開店によって、渋谷はファッションなどの現代文化の供給地点として若者にもてはやされるようになります。たとえば、渋谷公園通りが若者ファッションの先端として機能するようになり、新宿から渋谷が流行の発信地となっていきます。

一九九〇年代に入って、渋谷に突如「アムラー」が出現します。歌手の安室奈美恵さんのファッションにあこがれ、模倣する若い女性たちのことです。「アムラー」の出現は自然発生的なもので、とくに仕掛け人がいたわけではありません。「アムラー」の出現はコギャルファッションの流行につながっていきます。一九九〇年代の終わりには、顔を真っ黒にして髪の毛を白や銀に脱色し、顔中にラメを塗って唇も真っ白にした「ヤマンバ」などが出てきました。これらが一九九〇年代に渋谷で生まれた「ギャル系ファッション」であり、そこから出てきたのが、いわゆるギャル文化です。

また渋谷のシンボル的存在として、スクランブル交差点があります。スクランブル交差点は、祝祭の場としての側面を持っています。たとえば、近年の渋谷ではハロウィンがすごい盛り上がりを見せています。ハロウィン当日、仮装した人々は、信号が変わるたびにスクランブル交差点をくり返し横断したり、ひたすら人ごみの中を歩いたりすることで、楽しんでいるようです。特定のイベント会場などではなく、渋谷のまち全体がハロウィンという祝祭の場として機能しています。

それから、毎年大晦日にスクランブル交差点でくり広げられる「あけおめ」です。「あけおめ」は自然に発生したものらしく、いつ頃から始まったのかよくわかりません。年越しの瞬間が迫ると、どこからともなくカウントダウンが始まり、「あけおめ」と言いながら信号が青になるたびに横断者がハイタッチする現象が起こります。「あけおめ」で盛り上がりを見せる人々の大半は外国人です。そこにたまたま居合わせた人々が加わって年越しを祝います。あれも都市的な祝祭のひとつの形態だと思います。

最後に、渋谷がどのように変わりつつあるのか、お話ししたいと思います。二〇一四年から、渋谷駅を中心とした大規模な再開発が進められています。現在建っているヒカリエと向かい合う形で東棟が建ち、渋谷カルチャーの代表で会った渋谷パルコも一新されます。東急百貨店東横店東館跡地にも、複数のビルが新たに

建てられます。

渋谷駅も、コンコースの拡充やバリアフリー化など、さまざまな整備が行われます。駅の立体化が進められ、ハチ公口も現在と比べ大きく拡張されイベントスペースも設けられる予定です。再開発が終了する二〇二七年には、街の景観だけでなく人の動きや経済、文化も大きく変わりそうです。

一九七〇年代以降、日本文化、経済の中心となってきた渋谷とはどのようなまちなのか。それを考えてみようという単純な発想から、「渋谷学」は始まりました。國學院大學では学際的研究と呼んでいますが、さまざまな学問領域から渋谷について考えています。

池袋学について
――劇場と大学の連携による地域学の可能性

後藤　隆基

こんにちは。本日は「池袋学」のこれまでの経緯などについてお話しさせていただきます。

「池袋学」の第一の特徴は、東京芸術劇場と立教大学という公立劇場と私立大学の連携によって地域を考えるという点にあります。公立劇場と大学の連携によって地域を考える試みは、全国的に見ても稀有な事例ではないかと思います。もちろん東京芸術劇場だけでなく、ＮＰＯ法人ゼファー池袋まちづくりにご協力をいただいている他、地域の方々にも多く参加していただいております。

さて、みなさんは、池袋についてどのようなイメージを持たれているでしょうか。今年の夏に「創刊50周年記念　週刊少年ジャンプ展 VOL.1」開催記念企画『「週刊少年ジャンプ」with 東京メトロスタンプラリー』（二〇一七年七月十五日～八月三十一日）という企画が実施されました。東京メトロの各駅を『少年ジャンプ』の名作マンガの一コマで紹介するという、集英社と東京メトロのコラボレーション企画です。その中で、池袋は『ろくでなＢＬＵＥＳ』という、いわゆる「不良マンガ」が選ばれておりまして、葛西というキャラクターが「この辺は俺ら正道館高校のシマだって知らねーのか？」というセリフを言う一コマで紹介されています。

葛西が牛耳っている正道館高校は、卒業生のほとんどが暴力団になるという高校です（会場笑）。絵の脇に「東エリアは巨大商業都市、西エリアは芸術的な文化都市、異なる顔をもつ多面性ある街」というキャプションが付されてはいますが、このコマを持ってきていること自体、不良のまちとしての池袋のイメージが表れていると思います。

また、一九九七年に発表された石田衣良さんの小説「池袋ウエストゲートパーク」は、その後もシリーズ化され、二〇〇〇年には宮藤官九郎さんの脚本でドラマ化されました。今年の末から来年はじめにかけて、東京芸術劇場では『池袋ウエストゲートパーク』をミュージカル化した舞台『池袋ウエストゲートパーク　ＳＯＮＧ＆ＤＡＮＣＥ』が上演されることになっており、立教大学の卒業生である大野拓朗さんが主演のマコト役を演じるとのこと

で、非常に楽しみにしています。

二年前の『朝日新聞』に、東京の都市を特集した連載記事がありました。その中で池袋をとりあげた記事（「池袋　城北の副都心の街」全四回、二〇一五年十一月五・十二・十九・二十六日）を書かれた井上恵一郎記者にお会いしたときに「池袋というまちをどう呼べばいいかわからない」とおっしゃっていました。記事のタイトルは「城北の副都心の街」に落ち着いたようですが、池袋というまちの実態のつかみ難さは、池袋の持つ多面性あるいは雑多性が大きく影響しているのではないかと思います。

池袋というまちは、駅を中心として東西に分かれています。西口方面には、立教大学や東京芸術劇場、池袋西口公園、旧江戸川乱歩邸などがあります。また、ミステリー文学資料館や、漫画家の石ノ森章太郎の墓がある祥雲寺、熊谷守一美術館などもあります。北口方面には、ロサ会館や池袋演芸場、ロマンス通りなどの繁華街があります。ウイロードを越えて東口に行くと、ニコニコ動画本社や新文芸坐、歴史深いストリップ劇場、家電量販店などが点在しています。このように、駅を中心とした比較的狭い範囲に、さまざまなタイプの文化が存在している。池袋のおもしろさにつながる特徴ではないでしょうか。

二〇一四年に開講した「池袋学」は、立教大学と東京芸術劇場の連携講座です。二〇一一年に二者間で連携協定が結ばれたことが、ひとつのきっかけになっています。二〇一一年十一月には、本学のＥＳＤ研究センター（現・ＥＳＤ研究所）の企画運営、大学主催で記念シンポジウムを行いました。このシンポジウムでは劇場と大学の連携によって、地域のためにどのようなことができるかというテーマを検討したのですが、そうした機会を重ねる中で誕生したのが「池袋学」でした。

二〇一四年の開講から、まずは三年間を一区切りとしてスタートしました。講座は一回につき二時間程度で、東京芸術劇場が春季三回、立教大学が秋季三回を担当し、場合に応じて夏季・冬季に特別講座を実施してきました。池袋西口を基本的な対象地域として、立教大学と東京芸術劇場が、それぞれのリソースを活用したテーマで企画・運営してまいりました。初代座長は渡辺憲司先生（立教大学名誉教授、現・自由学園最高学部長）で、二〇一六年度からは阿部治先生（立教大学社会学部教授、同ＥＳＤ研究所所長）が座長を務めています。今年度は三年間の総括の年という位置づけで、複数の講座を実施しています。講座の内容は、年度ごとに講演録をまとめていますが、冊子として多くの部数を発行するのは難しいので、立教大学図書館のリポジトリに登録し、インターネット上で全文を公開する形をとっています。

こうしたプロジェクトや事業の内容は、中心的な役割を担う研究者・関係者の専門性に少なからず左右されます。これまで「池袋学」は、文学や歴史、芸術、文化の発掘、再考を中心的なテーマに据えてきました。その点、二〇一六年度から阿部先生が座長となったことによる変化にも注意を払いたいと思います。

近世文学研究者である渡辺先生が座長だった二〇一五年度の夏季特別講座では、戦後七十年企画として、かつて池袋駅前にあった〈ヤミ市〉をテーマにしました。立教大学、東京芸術劇場、豊島区の三者が主催となって「池袋＝自由文化都市プロジェクト実行委員会」を組織し、劇場での展示や池袋西口公園でのイベント

などを実施した、池袋の歴史を通して未来を考える試みでした。

二〇一六年度の夏季講座では、ユネスコの未来遺産に登録された〈雑司が谷〉をテーマに地域との連携を軸に据えました。地元の小学校や大学、商店街、町会、ＮＰＯなど、地域の人々が持つ地域への思いや活動を通じて、池袋や雑司が谷を考えていこうとしました。

「池袋学」は公開講座として企画運営されていますが、立教大学としては、本学の学生にどのようにアプローチしていくかということも重要な課題です。私は、今年度の全学共通カリキュラム／全学共通科目において「文化を生きる―「池袋学」入門―」という授業を担当しています。このように地域学を大学のカリキュラムの中に組み込むことも試みています。また立教大学には、ＲＳＬ（Rikkyo Service Learning）という科目もあります。概要については、立教サービスラーニングの冊子で次のように説明されています。

社会の現場での活動と、教室における学問的な教育との結合を目指す実践型の教育プログラムの一形態であり、正課科目として展開。さまざまな分野で、現場の専門機関の指導の下、学生たちは一定期間の社会的活動を行い、その実践と理論的学習を統合することで、単位が付与される

二〇一八年度には、「ＲＳＬ‐ローカル」の一環として、池袋を対象地域とする科目が発足する予定です。本学総長室の担当者を中心に、ＮＰＯ法人ゼファー池袋まちづくりにもご協力いただき、展開されます。立教大学のカリキュラムの中に、池袋というまちについて考える、地域の学びが組み込まれ始めています。

最後に「池袋学」が関係者以外からはどのように捉えられているのか、ということについてお話しします。一例として、黄文葦さんという方のブログの一部を抜粋してまいりました。

二〇一四年から立教大学で「池袋学」というタイトルの公開シリーズ講座が開催されている。地元の人びとが学者たちと一緒に地域の歴史を守り、そして語り継ごうとしている。／そもそも、外国人住民は「池袋は中華料理を勘能するところだけではなく、文化の交差点のような存在」ということを認識するべきであろう。〔略〕「池袋学」が奥深いと感じるこの頃。池袋という土地は、異なる価値観に包容力を持つ。私はこれからも「池袋学」を勉強し続けたい、そして池袋という多彩な土地の魅力を語り続けたいと決意した。（黄文葦「池袋で中華街を作る考えは間違っていた、私が感じた「池袋学」」『Record China』二〇一七年四月二十九日
http://www.recordchina.co.jp/b176261-s120-c60.html）

「池袋学」は、三年間という短い期間でしたが、劇場と大学の連携によって、いかに地域のことを考えいけるかということを課題として活動してきました。こうした活動が、外部からはどのように見えているのかを、我々自身も考えるべきなのではないでしょうか。

今後の「池袋学」の展開や継続性は未知数です。劇場と大学が

軸となるとはいえ、大学関係者も劇場関係者もやはり池袋の外部の人間が多いと思います。やはり、地域の方々とどのように連携していくか、その中でどのような学びが出てくるか、ということが「池袋学」の今後を考える上での大きな課題だと思います。

パネルディスカッション

戸沼幸市／石井研士／阿部　治／太下義之（司会）

太下　三つの地域学に関して興味深いお話を伺いました。時間が短くて話しきれなかったことも多いのではないかと思います。一巡目では、先ほど話しそびれてしまったお話などを聞いてまいりますが、その前に、私のことを簡単にお話ししたいと思います。私は新宿区で生まれ、豊島区立の小中学校に通いました。高校と大学は、渋谷駅をターミナル駅に使うところに通いました。ですから、私にとって、新宿、渋谷、池袋は大変なじみ深い場所です。この三つの都市の共通点としては、山手線と副都心線というふたつの南北軸で結ばれており、それぞれがターミナル、副都心を形成していることが挙げられるでしょう。また、この三つの地域はすべて水に縁のある土地です。渋谷には渋谷川があります。新宿の歌舞伎町にはもともと池がありましたし、新宿駅西口方面には江戸川浄水場という副都心の再開発のタネ地になったものがあります。池袋には、池袋メトロポリタンの付近に、池袋という名称の由来になったとされる沼がありました。

それから、三つの都市はともに、西武グループに縁が深い地域ですね。渋谷は、西武百貨店からパルコへと続く渋谷公園通りが若者文化を牽引し、渋谷のまちを変えた時代があります。新宿は、西武鉄道新宿線のターミナルがあります。池袋は西武鉄道池袋線のターミナルであると同時に、かつては西武美術館やスタジオ２００などがあり、セゾン文化の拠点でもありました。

さらに、この三つの都市は、今後大きく変化しようとしているターミナルであるという点でも共通しています。渋谷は、さきほど石井先生にご紹介いただいたとおり、駅を中心に一大開発が進められつつあります。新宿も、歌舞伎町が大きく変化しつつあるというお話をうかがいました。池袋は、西口公園が二〇一九年に本格的な劇場型の公園に変わりますし、東口方面では旧豊島区役所のエリアが再開発されていて、二〇二〇年に八つの劇場が同時にできる予定です。このように、三つの都市は、現在それぞれに大きな節目を迎えています。

そして、この三つの都市にはそれぞれ守護動物的なキャラクターがいます。渋谷は忠犬ハチ公が駅前に鎮座しています。新宿は、ＴＯＨＯシネマズのゴジラが有名です。池袋駅構内には「いけふくろう」という銅像があります。

いくつかの共通点を持った三つの地域において、「渋谷学」、「新宿学」、「池袋学」という実践が行われてきました。渋谷は主に都市民俗学、宗教学の視点から進められてきました。「新宿学」は、都市計画を軸としています。「池袋学」は、文学と社会学を中心として幅広い検討がなされてきたように思います。

このように、背景となるアカデミックな視点はそれぞれ異なります。

さきほど時間の関係でお話しいただけなかったことを、戸沼先生、石井先生、阿部先生に順番にお聞きしたいと思います。「池袋学」としては、新たに阿部先生がご登壇されていますので、さきほどの後藤先生のお話になかったような話もあればうかがいたく思います。

戸沼　「新宿学」の一回の講座の参加者は三十人ほどで、男女の比率は半々くらいです。講座では、かならずまち歩きをします。自分の足で現場に赴き、自分の目で現場を見ることを非常に重視していることが、一つの特徴です。もう一つの特徴は、歌舞伎町で講座の打ち上げをやることです。最終回の打ち上げは、「東京都健康プラザハイジア」の食堂でやります。「東京都健康プラザハイジア」の専務さんが「新宿学」に興味を持たれ、いつも場所を提供してくださいました。打ち上げは夜まで続くことがほとんどで、歌舞伎町のゴールデン街にも出かけました。講座から打ち上げまで、すべてが新宿のまちで行われるわけです。座学よりも実学の側面が強いことが「新宿学」の特徴です。

太下　ありがとうございます。次は、「渋谷学」の石井先生にお話をうかがいたく思います。さきほどお話しになれなかったことなどございましたら、お願いいたします。

石井　さきほどお話ししたとおり、「渋谷学」の特徴のひとつは、大学が行っている事業であることです。二〇〇二年、國學院大學の百二十周年記念事業の一環として「渋谷学」創始されました。大学の予算を割り当てるわけですから、当然学生への還元が重視されます。そのため、学生に向けては、半期制で十五回の講義が設けられています。オムニバス形式で、さまざまな教員が多様な側面から渋谷を取り上げています。一般の方々に対しては公開シンポジウムや講演、街歩きなどを行っています。また、二〇一五年には、國學院大學博物館で「渋谷」をテーマにした展示を行いました（「ミュージアム連携事業　平成27年度　企画展〈ＳＨＩＢＵＹＡ〉」）。展示には、予想以上に多くの地元の方々が足を運んでくださいました。國學院大學は、立教大学や早稲田大学に比べると知名度が低いと思います。國學院大學が渋谷にあることをご存知でない方も多くいらっしゃるので、渋谷にある大学としてブランド力を上げていきたいと思っています。

さきほど紹介した『渋谷学』の叢書は五冊刊行されておりますが、残念なことにまったく売れていません（笑）。学術ポータルサイトのCiniiで「渋谷学」と検索してみても、我々の論文がヒットするだけです。つまり、誰かが読んで引用するということが行われていないのです。一般書にしては少々高価だということもあります。より多くの人に「渋谷学」を知ってほしいと思い、今年の三月に『渋谷学』を出版いたしました。

もうひとつは、人文社会学系の大学でその中でもとくに人文系が強かったということです。そのため、歴史学や民俗学、宗教学の視点から都市を考える試みとなりました。近代化や産業化によってもたらされた現代の都市が、宗教的なものや非合理的なものを排除する合理的な空間だと思ったら大間違いで、都市の中にも宗教的なものは非常に多く存在します。こうした視

点から、渋谷についても考えてきました。

太下　ありがとうございます。「池袋学」に関しては、パネルディスカッションからご登壇の阿部先生にうかがいます。先ほどの後藤先生のお話には出てこなかったことや、これだけは触れておきたいというような興味深いお話があればうかがえればと思います。よろしくお願いいたします。

阿部　「池袋学」座長を務めております、阿部でございます。戸沼先生、石井先生のお話、大変興味深くお聞きしました。もっといろいろとお話しいただきたいと思うと同時に、私からもいろいろとお聞きしたいなと思いました。

みなさんの中に、池袋あるいは豊島区在住の方はどのくらいいらっしゃいますか。だいたい一割くらいでしょうか。それでは、在住ではなくとも、池袋でお仕事をされている方はどのくらいいらっしゃいますか。それでも少ないですね。私が住んでいるのは、茨城県のつくば市です。

「池袋学」の直接的なきっかけは、二〇一一年六月に締結された立教大学と東京芸術劇場が協定でした。私からは、その背景について少しお話ししたいと思います。私は環境教育やＥＳＤ（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）を専門としています。ゼミでは、地域をフィールドとして活動しています。当時、立教大学にこうしたゼミはあまりなく、私のゼミのほかに経済学部にもう一か所あるだけでした。現在は、「蝶の道プロジェクト」というものに取り組んでいます。都市には「自然がなくとも生きていくのに困らない」という考えの方が多くいます。生物多様性がいかに我々の生活にとって重要かを知ってもらうための切り口として、蝶を増やす活動をしています。また、この活動を通して、人と自然だけでなく、人と人とのつながりもつくっていくこと、そして持続可能な地域づくりにつなげることを目的としています。

学生だけだとどうしても地域のことをうまくつかめない部分が出てきますが、ゼファー池袋まちづくりや地域の方々に育てられて私のゼミの現在があります。立教大学には約一万五千人の学生がおりますが、大学に通う四年間以外は池袋に関わらないという学生がほとんどです。私のゼミ生には、地域の方々にお話をうかがったりするうちに、池袋が自分の第二の故郷のようになっている学生が何人もいます。

このように、立教大学の学生たちに、地域の方々と連携して池袋のことを考える時間やあるいは池袋を歩く時間をつくってほしいと思って、さまざまな取り組みをしてまいりました。そうした中で、二〇一一年に東京芸術劇場との間に協定が結ばれ、これをチャンスとして何かできることはないかと考えました。渡辺先生をはじめとして多くの方々にご尽力を賜り、二〇一四年に「池袋学」が始動しました。

「池袋学」は、関心を持っている人であればどなたでも大歓迎なのですが、特に池袋に関わる人々――地元住民の人たちだけでなく池袋で働く方々にも、池袋がどのような場所なのかを知ってほしいという思いがあります。池袋駅西口方面の開発が進められつつありますが、その中では自分たちが当事者として関わっていく自治や自律の視点が大切だと思います。「池袋学」では、単に池袋に関わる過去や現在の文化や歴史を学ぶだけで

なく、当事者として池袋の未来づくりに参加、関与していくための市民性を育んでいく必要があると思います。いつまでも「お客さん」のままで終わるのではなく、当事者として池袋の未来をつくっていく力を身につけてもらうということを重視したいのです。

こうした問題を「新宿学」や「渋谷学」ではどのように扱ってきたのかを、後ほどうかがえれば幸いです。また、立教大学では、ＲＳＬ（立教サービスラーニング）によって学生が地域に関わっていくことを推進していく予定です。早稲田大学や國學院大學の学生の「新宿学」や「渋谷学」を通じた地域との関わりについてもお聞きしたいと思います。

私は現在、地域創生のための人づくりを目的として全国のいろいろなところを訪問しています。その中で、首都圏の学生の話を聞くと、自分の生まれ育った場所に自分の居場所がないと感じている人が多くいます。たとえば中学校から別の地域の学校に通ったりすると、自分の生まれ育った地域に対して故郷としての感覚がほとんどないまま大人になることが多いわけです。当然のことですが、興味や愛着が持てない地域の未来ついて考えることはできません。

「池袋学」によって、池袋のすばらしさを見つけて、その場所を持続させたいという気持ちを育むことが大事だと思います。地域に関わる人が、その地域の魅力や価値を見出すところに、地域学の本質があると思うのです。そうしたことの意識から、昨年の夏季講座では雑司が谷の小学生に参加してもらいました。今年度の夏も、「池袋学」の一環として、小学生（三年生以上）二十名を対象として、「としまグリーンキッズプロジェクト―としまの自然を歩こう・学ぼう・発信しよう―」という小学生向けの企画も開催しました。

「池袋学」はもちろん、「渋谷学」も「新宿学」も、要するに「場」の教育です。「場」の教育こそが、その地域に関わる人達の、地域に対する誇りを育むことになると思います。そうした視点から、地元の人にどのように働きかけていくのかという点について、戸沼先生と石井先生にうかがえればと思います。

太下　阿部先生、ありがとうございました。戸沼先生より、さきほど少しご紹介のあったマスタープランについてうかがった後、阿部先生のご質問に関して討論していきたいと思います。戸沼先生は都市計画審議委員会の会長でいらっしゃいますが、「新宿学」との関連についてはいかがでしょうか。

戸沼　「新宿区都市マスタープラン」というものがあります。新宿区によって二〇〇七年に策定されたもので、約二十年後を展望して、めざす都市の骨格やまちづくり方針が示されています。その一部をご紹介しながら、阿部先生のご質問にあった、住民と「新宿学」の関わりについてもお話ししたいと思います。

新宿区は、武蔵野台地の東端に位置し、面積は約十八平方キロメートルで、東京二十三区では十三番目の広さです。新宿は、どのようにして現在のような市街地になったのでしょうか。

青梅街道と甲州街道の分岐点に「内藤新宿」が誕生したのが、宿場としての新宿の起源です。江戸時代の開削された玉川上水は、武蔵野面の水利の状況に大きな変化をもたらしました。それにともない、武蔵野面の開拓が大いに進められました。

明治に入り日本の首都が東京になり、近代化が始まります。新宿駅に鉄道が結節し、郊外と東京を結ぶようになり、駅前には大規模な商空間が形成されました。その後、東京の人口中心が西側に移動するにつれて、都心と郊外の交通結節点として、新宿の地位が高まりました。第二次世界大戦の戦火により新宿のまちはほとんどが焼失しましたが、戦後の復興によって高密度な市街地が形成されました。また、戦災復興から高度経済成長期に入る時期に新宿西口を対象として超高層ビルの建設が進められました。これらのことを経て、娯楽・文化の諸機能が複合的に集積し、東京の核として機能する現在の新宿があります。

都市マスタープランでは、将来的な都市機能や都市施設等の基本的な骨格を、将来の都市構造として示し、賑わいと交流を先導する地区を「心（しん）」、高い都市活動を支える幹線道路やその沿道を「軸（じく）」、都市に潤いを与える水辺やみどりのつながりを「環（わ）」と位置づけています。

たとえば、新宿駅周辺を国際的な賑わいと交流を先導する「創造交流の心」、高田馬場地区、四谷地区、神楽坂地区を賑わいと交流を先導する「賑わい交流の心」、大久保、信濃町、下落合、中井、落合、早稲田、曙橋等の駅を中心とする日常の生活圏の核となるエリアを「生活交流の心」とそれぞれ位置づけ、各エリアの特徴を生かしたまちづくりを進めています。

また、「環」のひとつに「七つの都市の森」というものがあります。新宿中央公園周辺、戸山公園周辺、落合斜面緑地、早稲田大学周辺、外濠周辺、明治神宮外苑周辺、新宿御苑周辺のまとまったみどりを指します。高層建築物というものは、技術的、経済的に価値は高いのですが、地べたの緑というのは、都市の命だと言えます。それをどれだけ確保できるかということを考えなくてはいけません。新宿区では、「七つの都市の森」を位置づけることで、みどりの保全と拡充を進めています。渋谷や池袋のみどりについてはあまり詳しくありませんが、地域のみどりをどのように位置づけていくのかということには興味があります。

もうひとつ重要なものとして、「景観まちづくりの方針」というものがあります。周辺との調和というものも重視して進めていきたいと考えています。そのベースになるのは、みどりを中心にして考えていくことだと思います。

都市マスタープランでは、「都市コミュニティ概念図」というものを作成しました。小学校区域、商店街の区域、町会・自治会区域と、さまざまな区域が重層的に入り組んでいて、それぞれの区域でコミュニティができています。都市マスタープランでは、こうした地域コミュニティの重要性を共有するため、それぞれの区域におけるコミュニティ範囲を地図上に概念的に表現したのが「都市コミュニティ概念図」です。

たとえば、今後三十年以内に首都直下型地震が来ると言われていますが、被災時における避難の段取りを決めるにあたっては、こうした地域的な情報を組み込んで専門家との議論を進める必要があります。その第一歩として、ベースマップを作成しました。これは、都市マスタープランにおいて、画期的なものであったと思います。今後のまちづくりにおいても、大いに生かしていきたいと思っております。

「新宿学」の受講者は、地元の人が大多数を占めます。ゲストに新宿区長を呼んだりすると、区長に食って掛かる受講者も出てきます。たとえば、外国人が自宅のまわりでごみを散らかすけれど、区としてきちんと対処してほしいなどということです。このように、「新宿学」の講座が、行政と住民との議論の場になることもあり、これもひとつの住民参加だと思います。

「新宿学」を通じて発信された地域の声は、「都市コミュニティ概念図」とともに今後のまちづくりにおいても重要になってくると思います。

太下　私も「都市コミュニティ概念図」は実に新しいアプローチだと感じます。「新宿学」をベースに、いいまちづくりが展開していくことが期待されます。石井先生からは、渋谷の変化についてお話をうかがいました。さきほどの話は、主にハード面の変化についてだったかと思いますが、ソフト面における変化についてもうかがえればと思います。

石井　さきほど、三つの地域の共通点として、西武グループの話が出ましたけれども、渋谷は東急電鉄および東急不動産の牙城です。現在進められている渋谷開発には、東急という企業の存続がかかっていると言っても過言ではないでしょう。渋谷区の区長も若い長谷部さんに変わり、いろいろなことが試みられています。その中でとくに興味深いのは、Ｓ‐ＳＡＰ（シブヤ・ソーシャル・アクション・パートナー）協定です。これは、渋谷区内に拠点を置く大学や企業などが、渋谷区と協働して地域の社会的課題を解決していくために締結する新しい公民連携制度です。國學院大学も、Ｓ‐ＳＡＰ協定締結大学として、渋谷の活性化に努めているとことです。

ご存知の方は少ないと思いますが、渋谷川という川があります。現在再開発をしているところで、渋谷川河畔には、並木道ができて広場が設けられる予定です。そこにカフェなどをつくる予定なのですが、恒常的に賑わいを維持するのは難しい課題です。大学で、住民の方々と検討を重ねているところです。また、渋谷に住む方々と渋谷にお勤めの方々の、渋谷に対するイメージの違いについても研究しています。

「渋谷学」がもっぱら対象としているのは渋谷といっても、渋谷区ではなく〈シブヤ〉と呼ばれる渋谷駅周辺エリアです。そこには明るい部分だけでなく闇の部分もあり、そうしたところで文化というものが自然と生まれるのかなと思います。たとえば、「アムラー」も自然発生したものでした。それから、ＳＨＩＢＵＹＡ１０９（以下「１０９」と略記）は一九七九年にオープンした当初は、ミセスまでをターゲットにした建物でした。バブル崩壊後の大幅な売上低下の中で、カジュアルブランド「ミージェーン」が依然として活況を呈していたことから、建物全体を「ミージェーン」と同じような若者向けファッションに特化したものにしようということになったわけです。１０９ファッションの別名であるギャル系ファッションは、〈シブヤ〉の持つ闇の側面の中から自然発生的に誕生したわけですが、日本あるいは世界へ流通していく中でハイセンスなものとして位置づけられていきます。その原型には混沌とした暗い情念のようなものがあります。

「渋谷怪談」の舞台として渋谷が設定されていることにも同

じようなものを感じます。「渋谷怪談」は、渋谷を舞台とした一群の都市伝説で、二〇一四年に公開された映画『渋谷怪談』『渋谷怪談2』（堀江慶監督、福谷修脚本）以降、系統をひく作品が継続的に制作されました。呪いや祟りをテーマにしつつも、作品の中には「女子高生」「ケータイ」「インターネット」「コインロッカー」といった時代を象徴する要素が盛り込まれていました。華やかさと猥雑さを併せ持つ街だったからこそ、〈シブヤ〉が舞台として選ばれたのではないかと思います。

歌手の尾崎豊さんが通っていたのは青山学院大学高等部ですが、下校時に夕日を眺めていたとされる歩道橋があります。この歩道橋に隣接して建つクロスタワーの三階には「17歳の地図」の歌碑があります。その周辺には、尾崎豊さんに共感した悩める若者たちによる「らくがき」が残されています。

一九九〇年代の終わり頃と比べると、センター街は明るい雰囲気を持ち始めました。しかし実際は「神待ち少女」がいる場所でもあります。「神待ち少女」とは、インターネットの交流サイトなどを利用して、「神」――その日の宿や食事を提供してくれる男性を探す少女たちのことです。渋谷には依然としてこうした暗い闇のような側面があります。しかし、そうした闇の部分が文化を生み出し、まちの発展につながっていったところが大いにあると思います。

最近では、「異色肌ギャル」と呼ばれる存在が国内外から注目を集めています。ドーランを使って、肌を青とか赤、黄色、紫色に塗って髪の毛も鮮やかな色にした女性たちです。これも自然発生的に出現したものです。どこまで発展していくのかはわかりませんが、文化的にはかなりインパクトがあるものだと思います。そうした点では渋谷というまちは、行政がつくるようなマスタープランとは別の地脈をもっているといえるでしょう。

太下　渋谷の闇の部分――サブカルチャー的な側面とも言えると思いますが、大変興味深くうかがいました。また「新宿学」のマスタープランへの反映の話も出ましたが、そうしたお話を聞く中で、阿部先生としてはいかがお考えでしょうか。

阿部　新宿区の「都市マスタープラン」における「都市コミュニティの概念図」は本当に画期的で価値の高いものだと思います。コミュニティの力は、われわれが生きていく上で重要です。それから、「七つの都市の森」の話も興味深くうかがいました。今や世界的事業となっているグリーン・インフラを、防災や環境保全も含めて都市の中でどう位置づけていくか。これもまた重要な問題です。さまざまな点において「都市マスタープラン」は本当に素晴らしいと思います。

本日のテーマは、全体的に地域の活性化につながっていく問題だと思います。日本の人口は減少していくと言われています。しかし、東京の人口はそこまで減少しないと予想されています。つまり、地方の人口が著しく減少することが見込まれているわけです。今後は、いかに東京と地方で人口のバランスをとるかということがとても重要な課題となっていきます。どのようにすれば、地方と都市が相互に利益を得ながら関わっていけるのでしょうか。そういうことを考えていくところに、都市における地域学の可能性があると思います。たとえば、豊島区は十数

自治体と姉妹都市関係を持っていますが、そうしたことの一つひとつに、東京一極集中の負の面に打ち勝つための地域学のアプローチのヒントがあるのではないかと思います。地方のことも視野に入れた上で、学生との関わり、地域の子供たちとの関わりについて教えていただければと思います。

太下　阿部先生のご質問は、大きく言えば、今後の地域学の可能性に関するものだと思います。さらに、地域学に対して、地域に住む方や学生がどのように当事者性をもって関わるのか、また、人口が衰退する地方などとの連携の可能性も含めて、どのような方向性がありうるのかというご質問だったかと思います。「新宿学」「渋谷学」ともに今後の可能性については議論なさっていると思いますので、そうしたところも含めて、最後にコメントをいただけますでしょうか。

戸沼　まず、大きな問題から言えば、地方の衰退をどうするかということがあります。日本の人口の動態を見てみると、今世紀の終わりには人口は五千万人ほどになるという見通しです。地方は出生率は高いのですが、その地方から上京してきた人たちは結婚率が低く、出生率も低い傾向があります。ですから、移民を現実的に考えていかなくてはいけないと思います。新宿をはじめとした、都市における国際化をどう受け止めるかは喫緊の課題です。新宿にある企業に勤めている外国人や新宿に居住している外国人は大勢います。外国人のコミュニティの問題は、ごみ処理などの細々とした問題から、礼拝場所などの宗教的な問題まで幅広くて、外国人といかに共存していくかということが国際都市としての新宿の課題です。そうした課題を解決するにあたっては、都道府県の区分は少々細かすぎると思います。私は、想定される全国の道州制単位の場所をまわっています。もう少し大きな区分で考えた地方創生を組み立てることが必要だと思います。

学生と地域の関わりについて言えば、都市計画を専攻する学生は、かならず地域のまちづくりに参加させています。日本国内に限らず、モンゴルや中国など海外のまちづくりに参加させる場合もあります。僕は、現場に赴いてものを考える主義です。地域から依頼されるまちづくりに学生を参加させることで、学生が当事者性をもって地域に関わっていけるようにしています。

国際化に関しては、早稲田大学は「グローカル・ユニバーシティーの実現」をメインコンセプトとして、大学におけるグローバル化を推進しつつ、学生のローカルへの志向をつよめるようにしております。大学としても、地方の衰退と向き合っていかねばなりません。たとえば、教員が地方の大学に赴いて授業をしたり、単位互換制度を設けて学生に別の地域の大学の授業を履修させたり、といった大学側の制度を整えていくことも必要だと思います。

太下　ありがとうございます。それでは石井先生、最後のコメントをお願いいたします。

石井　渋谷の再開発の問題に関わって、地域住民の方々とコンペや交流会を開いたりしています。そうした中で学生が地域を再発見しているということは間違いなくあります。ただ、地域へのまなざしも意識してはいるのですが、地方への還元はあまりできていないのが現状です。今後の課題としたいと思います。

太下　ありがとうございます。それでは阿部先生、最後のコメントをお願いいたします。

阿部　本日は「新宿学」と「渋谷学」という地域学の大先輩の話を聞けて大変うれしく思います。「池袋学」はまだ始動したばかりで、今後についてはいろいろ考えなくてはいけません。冒頭でも申しましたが、池袋あるいは豊島区に関わる人々が、主体的に地域の未来を見通していく力を養わなければいけないと思います。あらゆる地域学のベースがそこにあると思いますが、「池袋学」においても、この基本的な課題に立ち戻って考えていきたいと思います。ありがとうございました。

太下　ありがとうございます。これでパネルディスカッションを終わりたいと思います。先生方、ありがとうございました。

（とぬま・こういち　日本開発構想研究所代表理事、早稲田大学名誉教授）
（いしい・けんじ　國學院大學神道文化学部教授、同副学長）
（おおした・よしゆき　三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティング主席研究員、芸術・文化政策センター長）
（ごとう・りゅうき　立教大学社会学部教育研究コーディネーター）
（あべ・おさむ　立教大学社会学部・同研究科教授、同ＥＳＤ研究所所長）